

批評と紹介

俄軍・鄭炳林・高國祥（主編）

『甘肅出土魏晉唐墓壁畫』全三冊

關尾史郎

一

国際学会の開催や相次ぐ研究書の出版などに象徴されるように、近年にわかに注目を浴びるようになった河西地域の魏晉墓の磚画や壁画を集めた大型図録本が刊行された。まことに時宜にかなった企画で、本書の刊行により、磚画や壁画自体の研究はもちろん、それらを用いた研究が一層進展することが期待される。しかしながら、本書に収録された写真やそれに添えられたデータがそのまま研究に利用できるのか、と問われると、残念ながら答えは否である。本評では、本書の内容を簡単に紹介した上で、これを利用するにあたっての留意点を提示しておきたい。それは、ひとえに、この貴重な資料群がさまざまな分野の研究者によつ

てその価値を認められ、豊かな成果に恵まれることを誰にもまして祈念しているからにほかならない。

二

最初に本書の構成と内容について、簡単に紹介しておくたい。

本書の構成は以下のとおりである。なおカッコ内はそれぞれ墓の略号（XNM5ほか）もしくは墓群の略称（ZG, DH）、各墓（群）ごとに付された「綜述」の担当者名である。

総目

凡例

前言（編者）

嘉峪関新城魏晉墓・五号墓（XNM5）（侯晉剛・張斌）――

五七葉

嘉峪関新城魏晉墓・六号墓（XNM6）（侯晉剛・張斌）――

一三〇葉（以上、上冊）

嘉峪関新城魏晉墓・七号墓（XNM7）（侯晉剛・張斌）――

一四七葉

張掖駱駝城、許三湾、苦水口魏晉墓（ZG）（郭永利・寇克宏）――

八二葉

敦煌佛爺廟湾・西晉墓（DH）（郭永利・傅立誠）――

一六葉（以上、中冊）

酒泉西溝魏晋墓・四号墓 (JGM4) (高文佳) 一五五葉
 酒泉西溝魏晋墓・五号墓 (JGM5) (高文佳) 一八五葉
 酒泉丁家閘十六国墓・五号墓 (JGM5) (呉新榮) 一六七葉

酒泉西溝唐墓・一、二号墓 (JGM1, JGM2) (郭俊峰)
 一四一葉

附録・漢唐河西大事紀(以上、下冊)

まず前言では、本書の刊行が高らかに宣言され、次いで嘉峪関、高台、酒泉、そして敦煌の順に出土した磚画・壁画の特徴が概述され、最後に総括するように、その史料的美術的な価値や出土墓の構造的な特徴などが整理されている(この前言に従い、「駱駝城、許三湾、苦水口魏晋墓」については、以下、本評でも張掖ではなく、高台を冠することにする)。各墓(群)ごとに付された綜述では、それぞれの地理的な位置、発掘調査の経緯から墓の構造、壁画の内容などについて説明が加えられている。

次に本文とも言うべき磚画・壁画の写真だが、丁家閘五号墓の壁画を除くと、原則として一点の磚画に一ページが費やされている。それぞれの磚画には、タイトルと整理番号のほかに、関連のデータが書き添えてある。添えられたデータは、墓内の位置、磚面の大きさ、出土年代、作成年代、保存状態、および保存機関などを中心として、磚画の

モチーフや内容などにも及んでいる。

なお附録の「漢唐河西大事紀」は、呉炯炯・鄭炳林両氏の手になるものだが、なぜか実質的には「漢唐敦煌(沙州)大事紀」となっている。

三

右のような構成と内容からなる本書の意義は、何をにおいても、河西地域の主要な磚画と壁画をカラー写真により、一括して提供したところにあると言えよう。とくに高台の許三湾、苦水口の両古墓群、敦煌の佛爺廟湾古墓群の番号不明墓、そして酒泉の西溝古墓群の唐墓などの磚画は、今まで発掘報告さえなかっただけに、磚画自体の写真はもちろんのこと、付された綜述にも計り知れない価値がある⁽¹⁾。また発掘報告がありながら、各磚画の墓内における具体的な位置まではわからなかった西溝古墓群の四、五号墓についても、それぞれの綜述により問題が解決された。綜述の説明を、壁画全体の写真と比較しながら確認できるのもうらしい。

四

このような本書だが、いくつかの問題点も、またある。本評では、先ず編集上の問題点を指摘したい。

河西地域では、東は永昌・民衆から西は敦煌に至る間で、数多くの磚画墓と壁画墓が発見されており、その総数は、おおよそ百座に近いものと推測される。その全ての写真は、一挙に公開することは無理だとしても、そのなかから、いかなる理由により本書が右のような墓と磚画・壁画を選択したのか、が明らかではないのである。高台と敦煌については後述するとして、例えば嘉峪関と酒泉について見てみよう。両地には、新城と西溝・丁家開だけではなく、他にも磚画墓を有する古墓群が複数あるのだが、おそらくは磚画墓を有する代表的な古墓群として新城・西溝の両古墓群が、そして著名な壁画墓である丁家開五号墓が選択されたのであろう。ここまでは理解できる。しかし新城古墓群の磚画墓は全部で八座（一、三、七、一二、一三号墓、墓室内に少数の画像磚が配置されていた二号墓を含めると九座）に上るし、西溝古墓群の磚画墓も四座（四、七号墓）を数える。このうち、新城古墓群については、八座のなかから五、七号墓の三座が選ばれたのは、「規模宏大」（前言）とというのが理由のようである。一方の西溝古墓群については、七号墓の磚画に題記が付されていることが特記されているものの（同右）、その七号墓ではなく、四、五号墓の磚画を収録した積極的な理由は語られていない。

加えて新城古墓群の場合、確かに収録された三座は「規

模宏大」であるが、いずれも西晋時代の墓と推定されてお³り、特徴を等しくしている。むしろ伴出した鎮墓瓶の紀年から三世紀中頃のものであることがほぼ確実な一号墓や、逆に新城古墓群の磚画墓としては末期に属すると思われる一二、一三号墓などの磚画を収録してもよかつたのではないだろうか。それにより、磚画を最大限に利用して図像を表現しようとした初期から、積極的な磚画利用の意思を喪失してしまつたとしか思えない末期までの推移を観察することも可能になつたのではないかと思うからである。

磚画・壁画の選択にも疑問がある。通常、墓室が三室構造の場合は後室の後壁に、三室構造の場合はこれに加えて中室の壁面の一部に、墓主の財を象徴する奩盒、絲束、および絹帛などを描いた磚が配されていることは周知であろう。しかしながら、言うまでもなくこれらの図像は著しく画一的であつて、そこに墓ごとの特徴を見出すことは困難である。それにもかかわらず、西溝五号墓関連の写真のうち、一六葉までがこれら財の磚画なのである（おまけに、このうち「簡牘」と命名されたものは、新城古墓群では「絹帛」となっている）。同墓については、前室に羊群や穹廬を描いた磚画が多用されており、むしろこれらの写真こそ収録すべきではなかつたか。

五

ここでは、磚画・壁画の写真に添えられたデータについて検討する。

新城古墓群のように、既刊の発掘報告などから、出土墓のみならず、一つ一つの磚画が墓内で占めていた位置までわかっているものもあるが、それ以外、とくに高台と敦煌の古墓群については情報が不足している。この点について、補っておきたい。先ず敦煌から。

敦煌の磚画墓のうち、発掘報告⁵⁾がある佛爺廟灣古墓群の六座、すなわち一三三号墓（一九八七年発掘）、三七、三九、九一、一一八、および一六七号墓（以上、一九九五年発掘）と、殷光明氏（敦煌研究院）による報告と研究⁶⁾がある佛爺廟灣一号墓（一九九一年発掘）については、磚画のほぼ全容がわかっている。しかしこの七座以外にも、多くの磚画（墓）がこの地で発見されていることは早くから知られていた⁷⁾。本書にも、右の七座以外の墓から出土した磚画が多数収録されているが、出土状況に関する情報が乏しく、かつ墓ごとにまとめられてはいないので、細心の注意が必要である。

例えば一号墓出土の磚画は一三点収録されているが、DHS・001～007,016,017,019～022といったぐあいに連続し

ていない。しかもこのうち、初めの八点は、「出土於敦煌佛爺廟灣墓群、墓葬位置不詳、一九九一年（〇〇）は一九八五年出土、〇〇は出土時間不詳」となっており、一号墓出土であることが明記されていない。また敦煌の磚画は、嘉峪関や酒泉のそれとは異なり、墓室の壁面ではなく、墓門上の照牆に配されており、主たるモチーフも神獸なのだが、右の七座に関しては、それぞれの磚画について、照牆における層位など詳細な位置も明らかになっている。にもかかわらず、本書では照牆に配されていることを述べるだけで、具体的な位置についてはふれるところがない。しかし例えば四神のうち、青龍と白虎の磚画は照牆の下層に配されるケースが多いなど（一、三七、および一三三号墓など。なお九一、一六七号の二座は盜掘にあっ⁸⁾ていて、本来の位置は不明）、神獸ごとに定位置とも言えるような場所があり、単に照牆に配されていたというだけでは、説明にならない。次に七座以外の出土墓不明の磚画についても、出土年次やそれぞれの特徴などを手がかりにして、グルーピングを試みてみると、七座ほどになる⁹⁾。これらを合合わせると、敦煌では、二〇座近い墓から磚画が出土したことになる。そしてこれらの磚画の多くも神獸であり、敦煌の磚画の特徴が一層浮きぼりになるのだが、いずれも個性豊かなものだけに、詳細なデータを欠いていることがなんとも口惜しい。

一方、高台については、敦煌以上に複雑である。高台の磚画墓については、一九九四年に調査が行われた駱駝城址南方の駱駝城址古墓群のなかの一座¹⁰と、二〇〇一年に調査が行われた同城址西南の土墩古墓群の二号墓¹¹についてしか、報告がないからである。本書に収録されているうち、前者から出土したのがZG3・001～030である。残りのZG3・051～074は、やはり二〇〇一年に調査が行われた苦水口一号墓の磚画である（このうち051～066の一点については、墓内の位置まで詳しく記されているにもかかわらず、出土墓は不明とされている）。

許三湾古墓群とは、駱駝城址の西方に位置する許三湾城址の周辺に広がる墓群だが、本書に収録されているうち、ZG3・031～050（一九九九年出土）、075～082（二〇〇二年出土）の二八点がここから出土したものである。出土年次と連続する整理番号から、磚画墓が少なくとも二座あることがわかる。しかし寇克紅氏（高台県博物館）の報告によると、稚拙な墨絵である¹²は、前秦建元一四（二七七八）年の紀年を有する文字磚などにも出土したもので、これだけは出土墓を異にしていると考えられる。したがって許三湾古墓群でも三座の磚画墓が確認できるのだが、同じ一九九九年に出土したもう一方も、財を描いたものに題記を付したユニークな磚画群である。

六

最後になってしまったが、磚画・壁画の写真本体についてもふれざるをえない。これこそ大型図録本である本書に対する評価の根幹に関わるからである。前言によると、「高台M7」（これが高台のどの墓をさすのか不明）と敦煌の磚画を除く大部分は、二〇〇六年に墓室内や照牆などで現場で撮影されたものとのことで、磚画や壁画の「真实性・原始性」が保持されていることが謳われている。果たしてそうであろうか。

写真が資料になるとはとても思えないケースがいくつかある。一つは、磚面が変色・剥落したためか、写真からは内容を読み取れないものである。とくに新城七号墓の磚画には、何が描かれているのか、さっぱりわからないものが少なくない。例えば、JKM71・007-19は「牧馬図」というタイトルだが、白く塗られたような磚面に馬の脚らしきものが辛うじて確認できる。解説は「磚壁画保存基本完好、但画面磨損嚴重、内容依稀可辨」とする。同じような解説が同墓の場合、二〇葉以上に付されている。これでは資料にもならないし、鑑賞にも値しないではないか。このことは、西溝五号墓などの磚画にも指摘できるが、一部には撮影時の工夫などにより、解消できたのではないかと思われる

るものもある。

もう一方はより深刻な問題で、変色・剥落が進んだ磚画に、新たに手が加えられていることである。この点については、既に北村永氏が仔細に検討を加えているが、新城六号墓の磚画をあらためて先行の図録本と比較したところ、過半の六一点の磚画で描線が異なっていた。また本来は使われていなかったはずの黄色や濃い朱色に塗られている磚も少なからずあった。高台や敦煌の磚画には、明らかに模写と思われるものも含まれている。このような事情の全てが主編者の責任に帰せられるわけではないが、なんらかの説明があってもよかつたのではないだろうか。

もはや詳細は別稿に譲らざるをえないが、天地・左右が逆になっていたり、ピンぼけだったりする写真も一点や二点にとどまらない。「中国古代壁画精華叢書」のシリーズをはじめ、既刊の図録本の価値が褪せない所以である。主編者と学術顧問に、それぞれ甘肅省と中国を代表する研究者が名を連ねていることを想起する時、残念の一言ではとてもすまされないといい思いにかられるのは、おそらく評者だけではないであろうことを確信しつつ擱筆することにした。

註

(1) これらに対する既出の主要な概説や図録は左記の通りである。

高台苦水口古墓群・張掖市文物管理局編『張掖文物』、甘肅人民出版社、二〇〇九年／敦煌佛爺廟灣古墓群・敦煌博物館編『敦煌文物』、甘肅人民美術出版社、二〇〇二年／酒泉西溝古墓群唐墓・岳邦湖・田曉・杜思平・張軍武『岩画及墓葬壁画』、敦煌文芸出版社、二〇〇四年。

(2) 甘肅省文物考古研究所「甘肅酒泉西溝村魏晉墓發掘報告」〔『文物』一九九六年第七期〕。

(3) 甘肅省文物隊・甘肅省博物館・嘉峪關市文物管理所編『嘉峪關壁画墓發掘報告』、文物出版社、一九八五年。

(4) 甘肅省文物考古研究所、前掲「甘肅酒泉西溝村魏晉墓發掘報告」、岳他、前掲『岩画及墓葬壁画』、参照。

(5) 甘肅省文物考古研究所編『敦煌佛爺廟灣西晉画像磚墓』、文物出版社、一九九八年。なおこれによると、六座はいずれも敦煌空港の敷地内で発見されているので、正しくは新店台古墓群(DXM)の墓なのだが、混乱を避けるため、とりあえずこの報告書や本書の記述に従う。

(6) 殷光明(北村永訳)「敦煌西晉墓出土の墨書題記画像磚をめぐる考察」〔『佛教藝術』第二八五号、二〇〇六

年)、同氏「敦煌西晋墨書題記画像磚墓及相關内容考論」
『考古与文物』二〇〇八年第二期。

(7) 敦煌市博物館編、前掲『敦煌文物』。

(8) 嘉峪関市文物管理所「嘉峪関新城十二、十三号画像
磚墓発掘簡報」(『文物』一九八二年第八期)によると、
新城一三号墓でも、照牆の同じような位置に青龍と白虎
の磚画が配されていた。

(9) これらの詳細なデータは、『西北出土文献研究』第
一〇号、二〇一二年、に掲載予定の關尾「河西魏晋墓出
土磚画一覽」(以下、「別稿」)で提示する。

(10) 張掖地区文物管理弁公室・高台县博物館「甘肃高台
駱駝城画像磚墓調査」(『文物』一九九七年第一二期)。

(11) 甘肃省文物考古研究所・高台县博物館「甘肃高台县
駱駝城墓葬的發掘」(『考古』二〇〇三年第六期)。

(12) これについては、北村永「甘肃省高台县駱駝城苦水
口一号墓(2001 GLM1)の基礎的整理」(『西北出土文
献研究』二〇一〇年度特刊、二〇一一年)、参照。

(13) 寇克紅「高台許三湾前秦墓葬題銘小考」(中共高台
县委員会・高台县人民政府・甘肃敦煌学学会・敦煌研究
院文献所・河西学院編『高台魏晋墓与河西历史文化研究』、
甘肃教育出版社、二〇一二年)。

(14) 北村永「河西地方における魏晋画像磚墓の研究——

その現状と展望——」(『佛教藝術』第三一一号、二〇一
〇年)。

(15) 張寶璽編『嘉峪関酒泉魏晋十六国墓壁画』、甘肃人
民美術出版社、二〇〇一年。北村氏は、この時点で既に
手が入っていたものを看破している。

(二〇〇九年五月、蘭州大学出版社、蘭州、全三冊、B4
版、九二七頁)

(新潟大学人文社会・教育科学系教授)